

木の葉蝶

全

9.2
394

057459-000-6

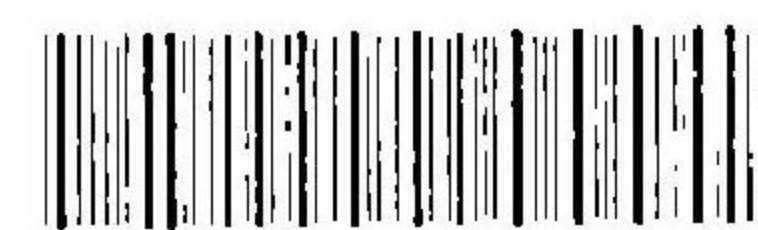
92-394

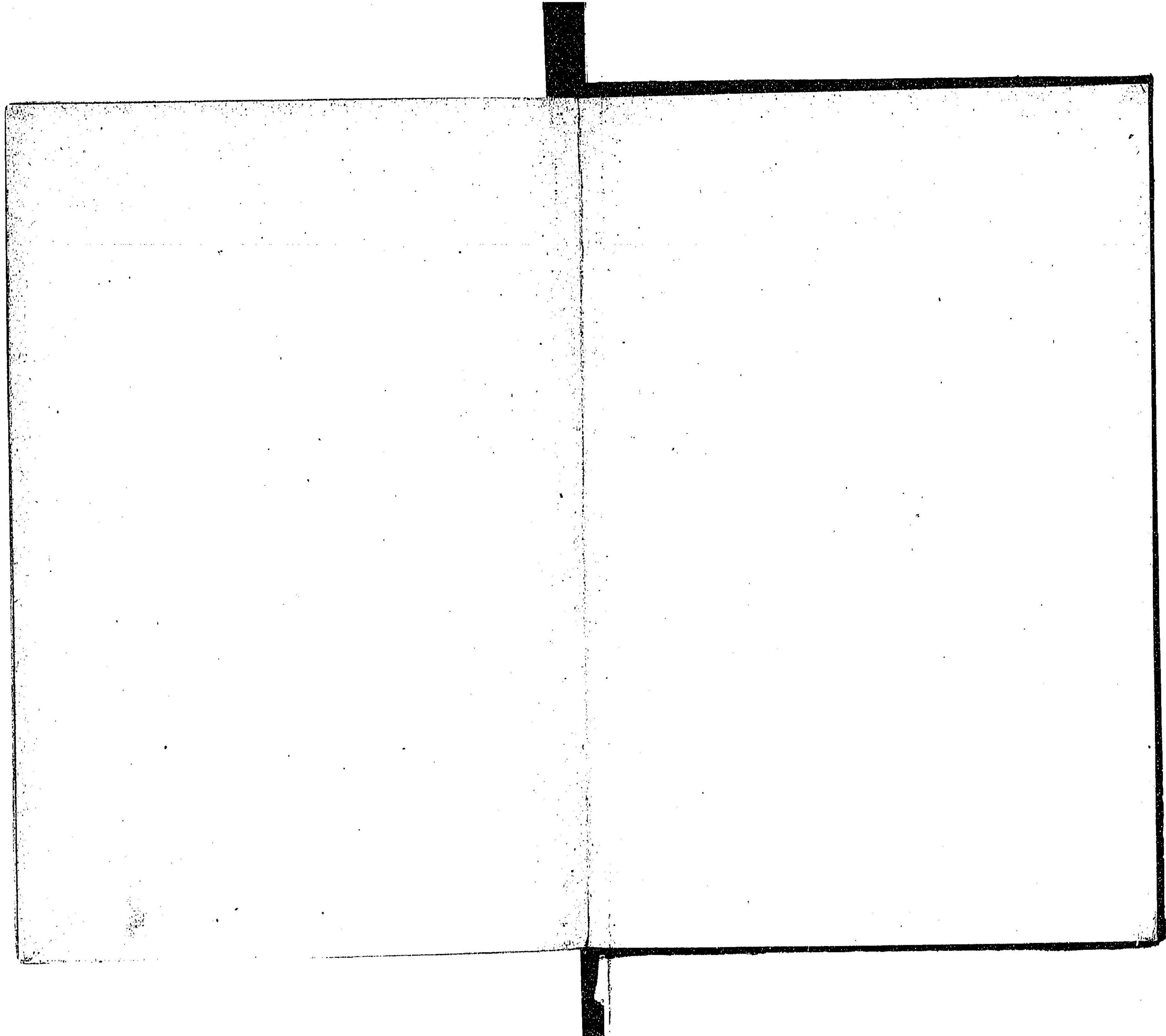
木の葉蝶

名和 靖 / 著

M42

CAR-0032





92
1768

名和昆蟲研究所編輯部編

木の葉蝶

發行所

名和昆蟲研究所

木の葉蝶鱗粉轉寫標本

甲 翅の裏面を現はしたるもの 金五拾錢 郵税

乙 翅の裏面のみを現はしたるもの 金廿五錢 貳錢

鱗粉轉寫標本は取扱ひ輕便にして破損の恐れなく且蟲に喰はるゝ憂なし而も實物と異ならず實に時代の要求に應じたる文明的標本なり今同斯學研究者のため右の代價を以て分譲す然れども普通の蝶類の如く多數に採集し得らるゝものにあらず限りある僅かの數に過ぎざれば希望者は至急申込

▲一般蝶類の鱗粉轉寫標本及び台灣沖繩産蝶類標本御入用の方は當所へ御照會あれ

昆蟲世界

毎月一回 (十五日)發行

代 一年分金壹圓拾錢 郵税不要 凡て前金の事

本誌は昆蟲學の普及發達を圖るため毎號口繪二枚を入り通俗平易に然も鮮明なる多數の木版圖を挿入し昆蟲に關する一切の事項を紹介す故に昆蟲研究に志あるもの又は農業に従事する者の好伴侶たるは勿論今一回大改良を加へ口繪は時々着色石版刷とし又少年諸氏の必讀すべき一欄をも設けたり

日本蝶類汎論

附補 菊版紙數三百頁 圖版十二葉 木版圖百五十八 正價金壹圓五拾錢 郵税金拾貳錢

訂正害蟲防除要覽 第三版

附補 菊版三十葉 木版圖三十入 正價金壹圓五拾錢 郵税金四錢

第一回全國昆蟲展覽會出品目錄 全

定價金八拾五錢 郵税金六錢

昆蟲標本製作全書 全

定價金八拾五錢 郵税金六錢

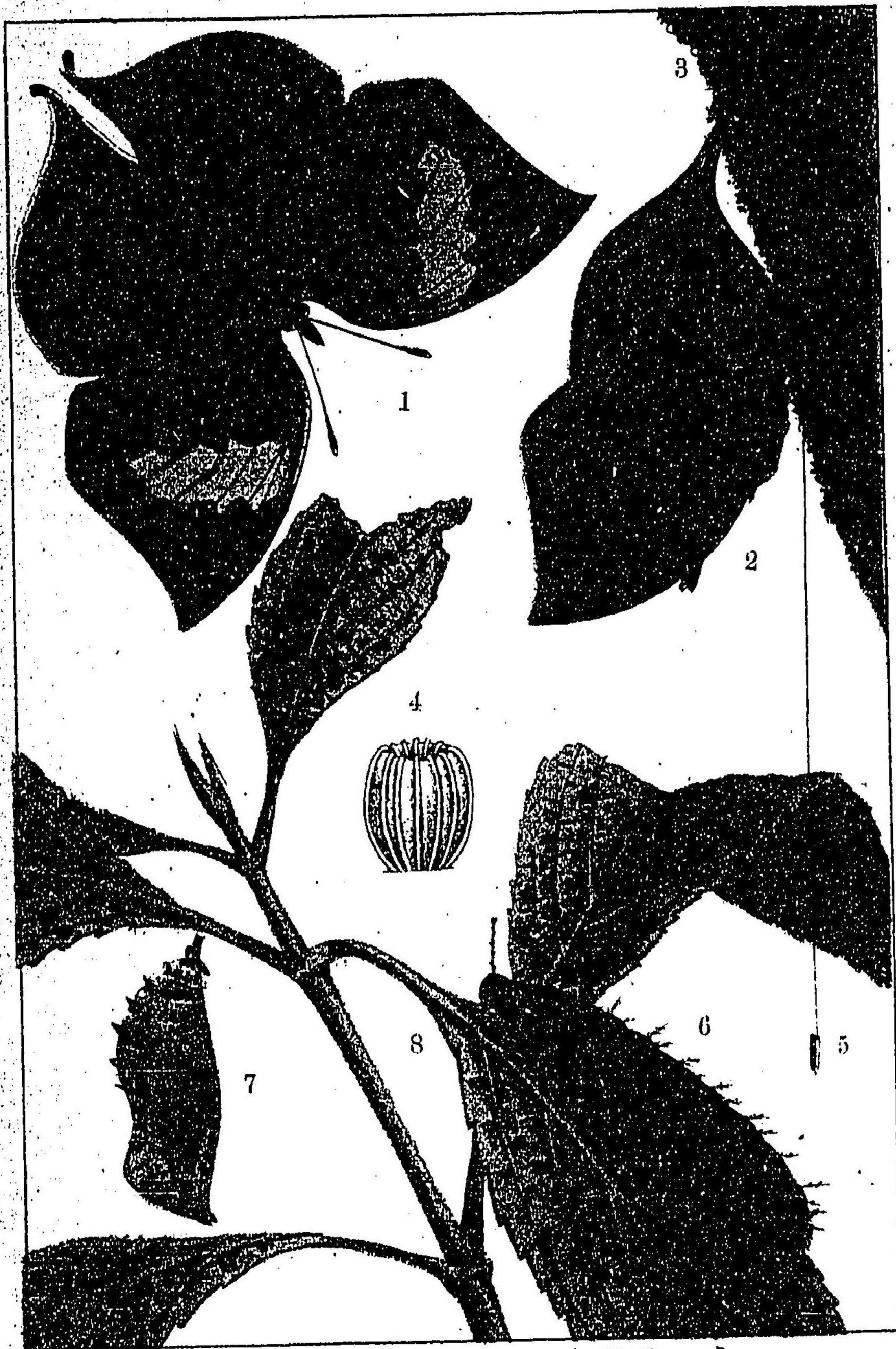
通俗昆蟲集覽 第一輯(說明書附)

定價金貳拾錢 郵税金貳錢

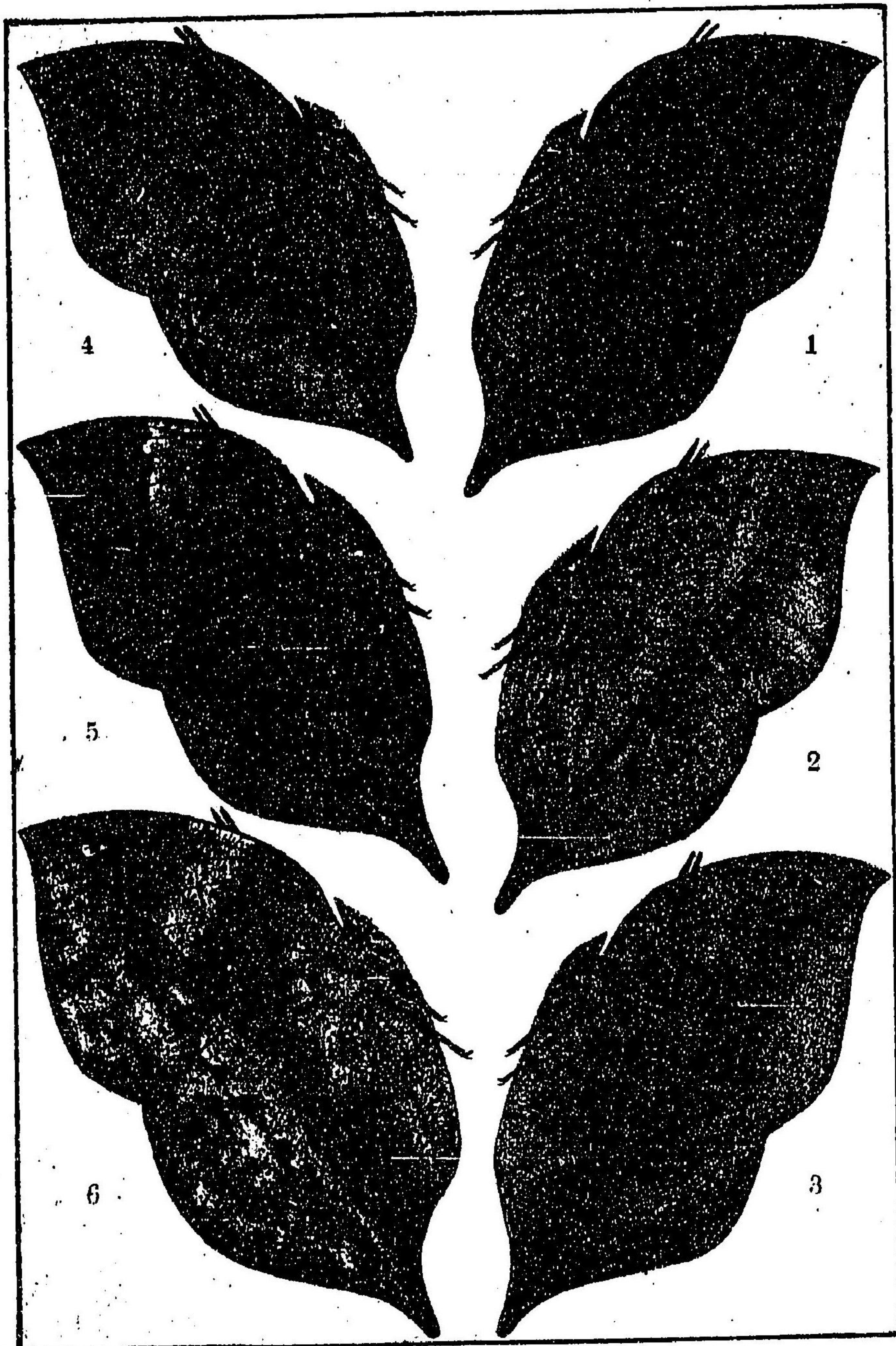
害蟲圖解 壹組廿五枚(横一尺三寸着色刷)

稻の部七枚 桑の部十枚 果樹部八枚 定價一組(廿五枚)金貳圓五拾錢 郵税金六錢

- 農作物害蟲標本 壹組(桐箱入) 解附
- 農作物益蟲標本 壹組(桐箱入) 解附
- 教育用昆蟲標本 壹組(桐箱入) 解附
- 自然淘汰標本 壹組(桐箱入) 解附
- 雌雄淘汰標本 壹組(桐箱入) 解附
- 氣候變形標本 壹組(桐箱入) 解附
- 教育用昆蟲標本 壹組(桐箱入) 解附



圖過經の (*Kallima inachus*.) 蝶葉の木



木葉の蝶 (Kallirna inachus.) の裏面の變化圖

92-394



岩崎卓爾君に

功勞ある

琉球の昆蟲界に

捧ぐ

著者



琉球八重山郡石垣島測候所長なる岩崎卓爾君は本職の餘暇を以て同地の昆蟲を研究せられ斯學界に多大の貢獻せられつゝあることは吾人の常に敬服する所なり特に木の葉蝶につきては非常の危険と困難とを冒して之が討究に従事せられ或は晨に峯巒を攀ち或は夕に絶崖を降りて遂に之れが習性經過等を闡明せられたり然れば吾人が今日此の編を草するを得しは重に同氏の賜と云はざる可らず今稿成るに及び聊か同氏の功勞を叙して緒言に代ふ

明治四十二年二月十一日紀元の佳節

著者

木の葉蝶

Kalima inachus Boisduval

十種の動物には其種の色彩があつて、其目的にも色々あるが、其中に己の棲める場所や又は己の止まる場所の周囲の色は似て居るものがある。アブラゼミが松の皮部と同じ模様をして居たり、カマキリが草の葉と同じ色をして居るが如きは、此例である。之は動物が他の動物を捕獲したり、又は他の強き動物の目を瞞まして自身を保護するに、大變都合よき事なれば、斯様の色を保護色と名づくるのである。保護色を有せる動物は澤山あるが、其か中にて最もうまく出来て居るのが木の葉蝶である。然れば保護色の好例としては、如何なる書物にも、木の葉蝶の省かれたることはない。随て今日にては小學讀本中にも其事が記載せられ、小學兒童さへも其名を知るに至つた。併し此蝶は我國にては、琉球が臺灣の外は棲まぬので、其土地でさへも普通のものではない。然れば標本を得ることも容易でないが、況して其生活の状態を知ることなどは一層困難である。元來此蝶の翅の表面は、卷首の圖版にあるが如く、黒色に青藍色を交へて、前翅には著しき橙色の幅廣き斜帯を有し、随分奇麗な色を呈して居るに係はらず、裏面は全く表と違ひ枯れたる木の葉其儘である。故に此蝶が翅を畳みて木の幹や枝に靜止する時は、全く枯葉の附着せるものと思はれない。然れば蝶類の大敵なる禽鳥の鋭き眼も、到底之を生きたる動物とは思はないで、只一片の枯葉と見誤るに違ひない。此事柄につきては、今より丁度四十年前、ワレーズと云ふ學者が、「マレー」群島といへる書物の中に、其習性の實驗を書いたのである。尤も此方は日本産のものと同一種でなく、カリマ、パラレクタ(*Kalima Paralekta* Horsfield)と云ふ種であるが、併し大變よく似たものである。同氏はスマトラ島にて、此蝶が高燥なる林中に在りて極て速に飛翔することや、

花若しくは緑葉等に止まらず、枯葉又は樹林灌木等の中に入りて忽ち其姿を匿し、俄に其隠れたる場
 處より飛び出して、又忽ち擦消す如く姿を潜める事や、又止まる時は殆んど直立せる枝上を把へて、兩
 翅を其体の背上面にて密に合せ、頭及び觸角を翅間に匿くして外に表はさず、後翅の尾狀部を枝に接して
 宛も葉柄の着を表はし、唯一對の中脚にて僅に枝を支へ、如何にも枯葉に擬似たる完全の例である。述
 べられ、此蝶が頭を上にして枝に止まれる圖が入れてある。然れば今日多數の書籍に挿みである木の葉
 蝶の圖は、皆ワレース氏の原圖を其儘に引用せるか、又は之を適宜に變じたるものと思はるゝので、日
 本産の木の葉蝶の圖にも、矢張り其姿勢が寫してある。然るに沖繩縣國頭農學校々長黒岩恒氏の觀察に
 よれば、之が静止の状態は、ワレース氏の圖や、其他一般の書物に在る如く、頭部を上方に向くるもの
 にわらずして、之を下方に向け、畢竟棘を倒にするものであるとの事實を、昨年の夏利氏より聞く事が出
 來た。故に一層此事實を確かならしめんが爲めに、之が觀察を、豫て斯道に熱心なる石垣島測候所長
 岩崎卓爾氏に依頼し、一方には其節昆蟲採集の爲め沖繩方面に派遣したる、吾が研究所助手森宗太郎氏
 へ、直接之が觀察を囑したるに、此等の觀察の結果は、遂に木の葉蝶の静止の状態を判明にする事が出
 來た。森助手は昨年の夏、石垣島に赴き、岩崎氏の指示の下に、木の葉蝶の棲息せる場所を觀察に行か
 れた。同地にて此蝶の多産する場處は深き窪谷或は峠の迎ひ合ひたる窪地に於て、當時雨多き季節なり
 しかば、窪は濁流を漲らして、之が觀察には少からぬ困難を感じ、或は荆棘に皮膚を破りて流血に濡ひ
 或は衣を腰上に掲げて濁流に佇むこと數時間に及んだこともあつたさうだ。同助手の觀察によれば此蝶
 は迅速に飛翔して、或は蔓生の植物、或は喬木の枝椏樹皮等に止まるが、最初止まる際には、或は頭を
 上方に向けて暫時其状態を保つことあれども、早晩其棘を轉じて頭部を下に向け、それより静止の状態

を保つことになる、故に全く静止せるものを觀察する時は一も頭を上方に向けたるものは無いとの事
 である。元來此蝶は缺蝶科に屬するものにて、同科に屬するヒラドンテフ、キタテハ、ルリタテハ等が静
 止の状態を保つ際に、棘を倒にせる事は、常に吾等の觀察する處である。然れば關係上木の葉蝶にも、
 かゝる事實のあり得べしとは黒岩氏の語に耳を傾けし時、直に吾人の腦中に浮びた事であつたが、遂に此
 が事實となつたのである。此事につきましては、最初の觀察者たる黒岩氏に、感謝の辭を呈せねばならぬ、
 扱此事實より推測すれば、從來の説明とは、多少其理由を異にする點がある、普通の圖に示す處によれ
 ば、此蝶は枯葉が生きたる時の姿勢のままに、枝椏に附着したるものに擬したることになる、隨つて上
 向ける二三の枯葉の中に此の蝶を畫けるのか從來の慣例である、併し之れを熟考するに元來枯葉が
 自然の姿勢のままに枝椏に附着して居る事は、甚だ疑問である。葉が自然に枯るゝ際には、葉柄と枝椏
 との間には、離隔層を生ずるものなれば、散落するのが通常である。特に熱帯地方に於ては、樹木は殆
 んど常緑であつて、九州以北に於けるが如く、落葉木が秋末一時に色を變じて、枯色を表はすが如き事
 はない。併し舊葉は漸次新しき葉に替はりて散落するのである。此等を考ふれば、葉が枯れたるま
 に枝椏に附着し居る事は、些と信じ難き點にして、例令之れありとするも、夫は甚だ稀なる事ならん
 思はれる。是に反し散落したる葉が、其附近或は其下方の樹木の枝椏に葉柄によりて懸垂せる事は、實
 際有り勝ちの事なれば、木の葉蝶の棘を倒にせる状態は、寧ろ枯葉が其葉柄にて他の枝椏に引懸りたる
 か、又は枯葉が枝椏を脱せんとして未だ脱せず、葉柄の一部にて僅に枝に附きて下向せるものに擬する
 ものと見る事適當であらう。特に此蝶の翅の裏面の模様を觀察するに、其變化實に種々にして、或は黄
 褐色、或は赤褐色、或は灰褐色を呈し、又腐りかゝりて黴の生じたるが如きものすらあり、枯葉が多少

枝上に止まることありとするも、微の生ずるまで直立のまゝに着生せんとは思ひ掛けざる次第なれば、倒に止まる事が寧ろ枯葉の自然の狀態に酷似する所以であつて、隨て敵の目を免るゝ事になる。倍て散落せる枯葉は枝樞の間にも緑葉の間にも掛るものなれば、向後此蝶を畫くに當り、之を倒に畫く必要はあるが、必しも之を枯葉の間に漬く必要はない。又實際に於て此蝶が、枯葉のある場所のみを選びて止まるものでもないのである。尙此蝶が擬せるのは、缺刻や齒縁を有せる葉でなくて、全縁のものでもなければならぬ。又枯るれば直に卷縮して皺襞を生ずる薄質のものでなくて、枯れても其外形を變せざる寧ろ革質の葉でなければならぬ。森助手の觀察によれば同地方に生ずる樟科植物の枯葉は、其外貌非常に此蝶に似て居るとの事である。樟科植物は重に熱帯産にして全縁革質の葉を生ずるものなれば、或はさもあるべしと思はる。併し此點につきては、廣く此蝶の分布せる印度方面に涉りて、今一層の觀察が必要である。以上は専ら本邦産の木の葉蝶(Kanina inachus)につきて觀察又は推測したるものなれば此理由を以て直にワレース氏の原圖を非難することは出来ぬ、併し種々の點より考察すれば、或は多少想像によりて畫かれたるにはあらずやとの疑なきにしもあらずである。

次は木の葉蝶の幼蟲である、此幼蟲につきて知れる人は、恐くは從來本邦には一人も無かつたに違ひない。然るに本職の余暇を以て常に斯學の爲めに多大の貢獻せられつゝある岩崎氏は、千辛を排して幽谷に入り、萬苦を忍んで絶崖を攀ち、親しく此蝶か現に産卵しつゝある所を追窮して、遂に其卵粒を得られ、之に卵化せしめて幼蟲を得、之を飼育して遂に其經過を知られたるである。尤も此蝶の幼蟲につきては嘗てダッジソン(Dudgeon)氏が觀察せられた事があるので、其大要は次の如く記してある。幼蟲は黒天鵝絨色を呈して可なり長き黄毛にて被はれ、刺は都て赤色を帯べり。十分成長したるものには、各節に十一個の刺を有せり、即ち背部に一個、亞背部に二個、側部に三個とあり。併し吾等は從來之が實物を見る事を得ず、又其食草をも知ることが出来なかつたが、今回岩崎氏の努力の結果によりて之を明にし、之を世人に紹介する事の出来る様になつたのは、實に喜ばしき次第である。しかして之を精驗するにダッジソン氏の記載にては少しく物足らぬ心持がする。此點につきては偏に岩崎氏に感謝せねばならぬ。

木の葉蝶の卵は、略楕形にして大き粟粒位である。一般に蝶類は、卵を其嗜好食物に産み附くるが、此蝶は食草以外のものに産み附くるのである。最初岩崎氏が此蝶の産卵を實驗せられたのは、アラガシの幹であつた。アラガシに産卵する以上は、此蝶の幼蟲が其葉を喰ふならんと思ふが當然であるが、實際之が喰ふ植物は、アラガシでなくて、其根の處に生育せるリウキウアキ一名ヤマアキ(Shobianthes faecifolius Nels)(爵牀科)であることが知れた、卵は上の方にありて食草は下の方にありとすれば、卵化したる幼蟲は如何にして食草に達するかといふに、之はよく他の毛蟲等にて見る如く糸を曳きて垂下するのである。斯くて鉛直に下に辿れば自らリウキウアキの葉に達する様になつて居る、適當の場處を選びて産卵する親といひ、又其幼蟲に適當の方便を有せる、自然の妙理は、實に驚歎すべきものである。然るに爰に疑問とすべきは、何故に母蝶が直接の食草に産卵せざるかである、若し其産卵期に食草がまだ地上に發芽せざる様の事あらば、止むを得ず他に産卵すべき場處を索めねばならぬが、併し此蝶の産卵期には、食草は常に生育して居るから其必要を認めない、或は此蝶の原産地に於て、是に類したる事實あり、之が遺傳となりて、かゝる本能を生じたるものかとも思はるゝが、之は憶測に過ぎない。今八重

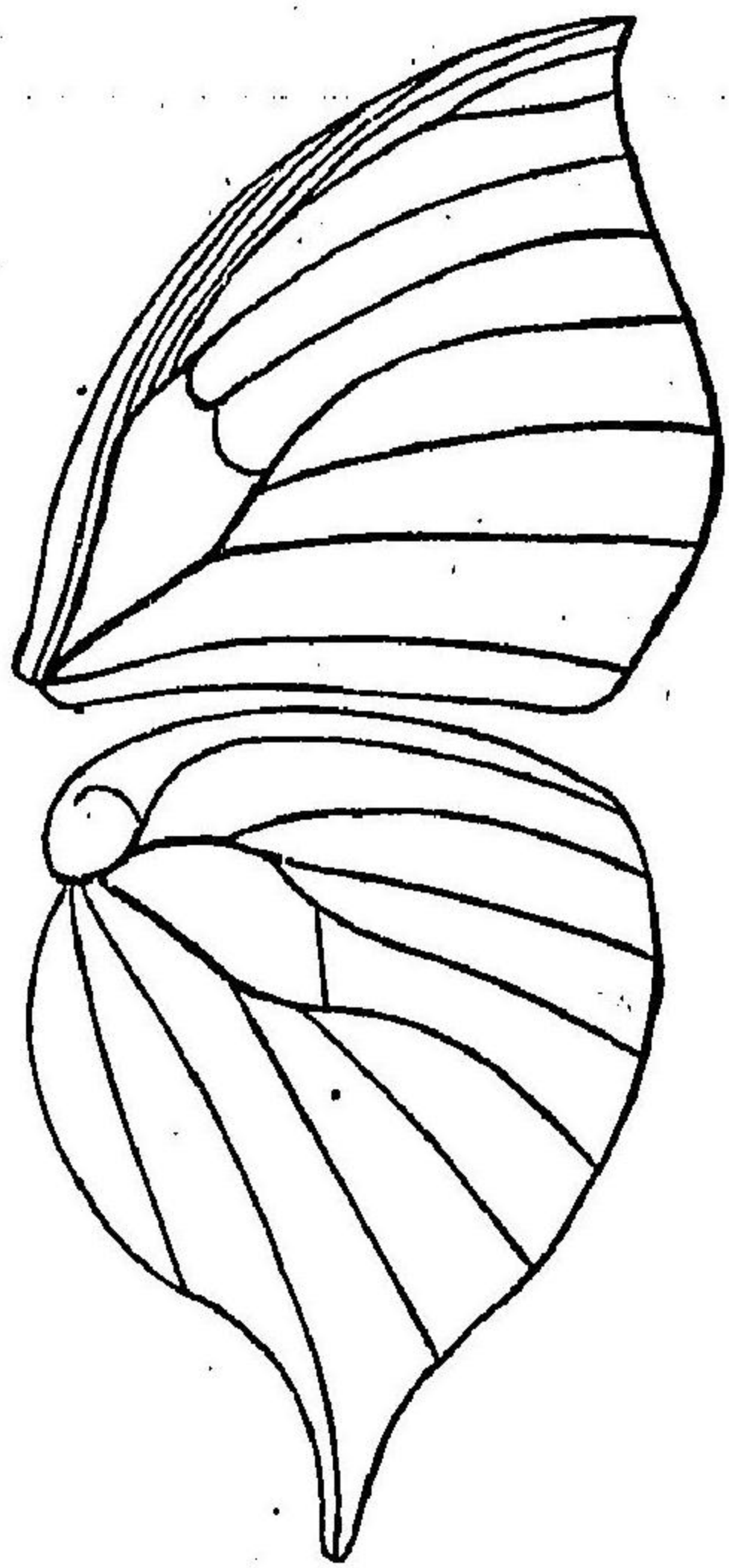
山嶋一部の観察によれば、或は温度の關係あるやに思はるゝ點がある。是につきては同嶋に於て此蝶の棲息せる場處の状態を述ぶる必要がある。此蝶の棲息せる所は多くは溪流の左右に沿へる林又は雨齧の相接せる隙間の森にして吾人が内地にて普通に見る如き森林ではない。借此蝶は如何にして出來たるものかといへば、或る地盤の表面を一道の水流が幾千萬年流過して浸蝕作用を逞ふしたる結果、地盤は漸次に削磨せられて、遂に深き豁谷を形成したのである。然れば豁谷といつても其幅格別廣くなく、現今豁谷は其底を流れて其兩岸には樹木を生育せしむる事になつて居る、故に往々遠くより望めば、森林は僅に其頂端を地面上に出すに過ぎざるを以て、殆んど其處に密林ありとも思はれねども、是に近づけば深谷前に横はりて左右絶崖の間に、鬱蒼たる森林の生せるを見ることが多い。然るにウキウキの生せる所は、溪水に接せる小部分の地にして日光殆んど直射せず、晝尚暗き有様にして、夏日といへども冷氣に徹する感がある。然れば其上方八、九間も離れて、日光の透過し得べき産卵の場處と比較するときは、其温度に非常の差があるのである。温度の高低は卵の孵化に直接の關係を有せるを以て、遂に此蝶をして食草以外に産卵せしむるに至つたのでは有るまいかとも思はるゝ、併し生態上の説明は、廣く此蝶の棲息地の状態を觀察研究するに非ざれば、到底其真相を知る事が出來ないから、此點につきては先づ決斷を下さぬのが適當である。俗常識にて考ふれば八重山嶋の如き常に強風多き地にて、幼蟲が高き處より糸を曳きて降下することは生存上甚だ危険の感がある。然るに是亦地勢に左右せらるゝものにて前述の如き深き谷にては林中は殆んど無風と云つて宜しき程である。故に風の爲めに幼蟲が吹き飛ばさるゝ氣遣は先づ無きものと見て差問ない。次に又最も興味あるは母蝶が産卵の際に於ける動作にして、其場處につきては非常に苦心するものゝ様に見ゆるのである、前述の如くウキウキの蕃殖せる場處

は豁水の左右僅か一二間の間に於て地勢に従ひて多少群落をなして居る、然れば蝶は初め成るべく廣き群落を選ぶかの如く、又其恰好の位置を索むるかの如く、彼方此方を飛び廻はりて、其選定に時を移すこと數分間、其狀死も幼蟲の食物につきて大に配慮しつゝあるものゝ様である。斯くて適當の場處を見出すや、己は螺旋狀に上方に飛翔して前に己の選びたる場處の殆んど直上に達するのである。凡そ蝶が一直線に上方に達せんとするには、其飛翔の作用上より螺旋的の経路を取ること最も至當のことと思はるゝ、然るに上方には樹幹枝樞參差錯雜せるが故に、恰好の場處に卵を置くことが出來る。此の如き方法にて産卵せるにより、孵化の際に及び、幼蟲が一直線に垂下すれば、自ら其食草上に達すること少しも異じむに足らぬのである。孵化したる幼蟲は一分五厘許にして頭部黒く、胸部も暗黒くして黒毛を生じて居る。一眠を畢れば頭部に角狀突起を生じ、二眠後に至りて軀に分岐せる肉針を生じ、爾後數回の脱皮を経て十分成長すれば、軀長二寸内外に達し、全身黒天鵝絨の如くして淡褐色の短毛と黄褐色の分岐肉針とを備へ、頭部には二本の長くして分岐せる角狀突起を有して居る。是より絹糸を食草又は附近の植物の枝樞の一部に績き、軀末の鈎にて倒に垂下し、かくて最後の脱皮を畢れば蛹に化するのである。蛹は一般の缺蝶科に見る如く懸蛹にして、蛹化後三時間位は漆黒色を呈するも、漸次褪色して遂に褐色に變する。長さ一寸三分にして腹部の背方には各節數個の突起を有して居る。其後數日を経て終に成蟲即ち蝶に化するのである。森氏が飼育せられたるものは、八月一日に産卵したるものが、四日に孵化し、五日に一眠に就きて、六日に起眠し、七日に二眠して八日に起き、其後數眠を経て二十五日に蛹化した。又岩崎氏の飼育せられしは、八月十日に孵化したるものが、九月二日に蛹となり、九月十三日に羽化した。然れば幼蟲の期間は大略二十四五日なることが分る。併し此間に幾回の脱皮をなすか、又は

一年に幾回發生するかは、まだ不明である。成蟲の記載については木の葉蝶屬の定義を擧げて次に是を述ぶる事にするが、其前に此蝶の分布を記する必要がある。此蝶の棲息區域は先づ東洋洲であつて、印度にては、ヒマレー山以南の各地に産し、それよりアッサム、ブルマ、スマトラ、ボルネオ、ジャバ、ヒラッピン等に及び南部支那より臺灣、琉球に亘りて居るが、未だ九州以北に産するを聞かない。然るに爰に又疑問とすべきは、之が食草である。元來リウキウアキは印度の原産にて、琉球のものは皆移植したるものこの事である。然れば此幼蟲の食物が他にあればいざ知らず、若し此植物に限らるゝ様の事あらば、少くとも琉球への分布は、リウキウアキ移植の後とせねばならぬ。森氏は此幼蟲に與ふるに、是に似たる種々の植物を以てしたるも、一も喰はなかつたそうである。是につきては分布上大に關係あるものなれば今一層の研究が必要である。以上は重に岩崎氏と森氏との觀察實驗に基き、是に少く余の見聞せる所を加へて綜合したるのみであるから余は唯記載者にして研究者でない事を明言して置く。又辭につきては責任余にあり、以下は木の葉蝶の形態につき余の觀察せる要點である。

此蝶は缺蝶亞科のコンナンテラ屬 (Kalima) に隸するものにして、此屬は千八百四十九年にダーブルデー氏 (Coadley) の創立せるものにしてビンガム氏 (Bingham) は此屬に對し左の定義を與へたり。
 成蟲は雌雄共に前翅は甚だ廣き三角形をなし、前縁及び外縁は略同長にして、内縁は短し、前縁は弧形をなし、翅頂は鋭く往々伸長して鋭尖端をなす、外縁は斜にして翅頂の下部より二脈までは外方に傾き、夫れより稍斜に内方に向ひて後角に至る、後角は角をなせり、内縁は少く波状を呈す、室は閉鎖せられ、短くして翅長の三分の一を少く超過す、六及び七脈は一点より發す、故に上横脈は甚だ短小なり、中横脈は斜に内方に傾き、下横脈は纖弱にして灣曲せり、三及び四脈は室の下端より發し、九脈は七脈

コンナンテラの翅脈圖



の基部半分の外前方より發す、十脈及び十一脈は遊離せり、後翅は不規則なる三角形或は略三角形を呈す、前縁は甚しく弧形をなし、外縁は圓形にして、前角は角をなし、後角は長き筈形の尾に延長せり、内縁は先方凹形をなし、基部は廣き腹褶を形成せり、室に僅に閉ざされて甚だ短く殆んど翅長の三分の一なり三脈及び四脈は柄を有し、六及び七脈とは明に分離せり、翅前縁脈は先端又狀をなせり、觸角は前翅の半より少く短く、狭長にして漸次膨大せる根棒狀たり、唇鬚は長く前方扁平にして頭を超えて突出し、第三節長くして頂端尖れり、腹眼は裸出せり

コンナンテラ Kalima inachus Boisduval. 異名 Paphia Hügelii Kollar; K. Limborgii Moore; K. Atkinsoni Moore; K. Buckleyi Moore; K. Boisduvali Moore. K. Hultoni Moore; K. Ramsayi Moore.

此蝶は千八百三十六年ボイスデュバル氏によりバヒア、イナクスと命せられたるがカリマ屬の創立により其方に編入せられて今の學名を有するに至れり。

成蟲 雌雄共に殆んど同形、前翅は黒色に紫光を帯び、基部より中央の大部分は、青藍色を呈し、多少金性光を放つ、前縁の略中央より後角の外方に亘り、赤褐色の著しき廣帯あり、内方縁は不規則に出入せり、其内方にて二脈と三脈との間に、略橢圓形の一点を印す、又翅頂に近く略方形の一点あり、齒牙狀の黒色亞外縁線は、橙色の廣帯部に著しく、其外方には黒色の微点を密布せり、後翅は帶紫

暗黒色にして大部分は青藍色を帯び、一部或は孔雀緑光を放つ、前縁及び内縁部は淡黄褐色を呈し、外縁部にも多少橙褐色を混せり、黒色の亜外縁線は歯牙状を呈して顯著なり、又此線の内方にて三脈より七脈の間に黒斑を印せり。裏面は其變化質に甚しくして、若し精密に比較するときは、千頭千様の相異を見ること、尙多數の枯葉の多少其色澤を異にせるが如し、唯共通せるは此蝶か翅を疊みたる時に、前翅の翅頂より後翅の尾部に殆んど真直に走れる、中肋線の線なり、色には種々あれども、銀鼠色の一線を伴ふを常とす、其地色には黄灰、褐灰、紫灰、銀鼠、鋪褐、黄褐、紫褐等ありて、此中に斑紋の著しきものと殆んど紋理を有せざるものとあり。紋理あるもの中には特に翅脈の暗黒色を呈して著しきあれども多くは著しからざるを常とす、斑紋には中肋線の左右より上方に向ひ斜に多少濃色の條帶を發して、葉の支脈に擬するあり、又よく枯葉に現はる、如き雲紋様の腹維なる暈影を現はすあり、之を要するに中肋線の外方は一般に内方より濃色にして、宛も枯葉が光線に對して陰影を現はせるが如きもの最も多し、又各種に通し黒点を散布的に、又は群集的に印して、恰も微菌の枯葉に生せるが如き一種の看を呈するあり、千態萬狀到底言辭に盡すべきにあらず、軀體は藍黑色にして斑紋なく、脚は翅の裏面の色と略同一にして、第一脚の不完全なるは缺蝶科の特性を表はし、第三脚の腿節の末端には白点あり、翅の展張は雄二寸四分内外にして、雌は二寸九分内外、翅長は一吋内外なり。

卵 球狀に近き橢圓形にして、底部は少しく扁平に、上端少しく窪み、宛も地球儀上の子午線の如く一極より他極に向ひて走れる十二三條の隆起せる線を有せり、色は淡灰褐色にして、徑略五厘なり。

幼蟲 十分生長したるものは、長さ二寸内外にして、黒天鵝絨色を呈し、全身に淡褐色の短毛を粗生す、頭部には多數の顆粒狀突起を有し、其頂端より二條の黑色角狀突起を生ず、長さ二分七八厘にして、針

狀の短枝極を支出し、其端に毛を有せり、又突起の先端は瘤狀に膨大して、之より不規則に上方斜に短針を叢生す、棘の各節は數個の横皺を有し、枝極を分枝せる黄褐色の肉針を有せり、背方のもの比較的長く、側下方のもの短くして其數は節によりて異れり、今之を展開して摸型的に圖表すれば左の如し。

脚列	基線列	氣門下線列	氣門列	側線列	亞背線列	背線列
1	○	○	○	○	○	○
2	○	○	○	○	○	○
3	○	○	○	○	○	○
4	○	○	○	○	○	○
5	○	○	○	○	○	○
6	○	○	○	○	○	○
7	○	○	○	○	○	○
8	○	○	○	○	○	○
9	○	○	○	○	○	○
10	○	○	○	○	○	○
11	○	○	○	○	○	○
12	○	○	○	○	○	○

數字ハ棘節ノ數 ○ハ脚ノ位置
○ハ氣門ノ位置 ●ハ肉針ノ位置ヲ表ハス

(2) 少しく壘形を有せるもの (3) 翅脈の著しくして支脈斑を有せるもの (4) 紫灰色にして微菌紋理を有せるもの (5) 黄褐色にして雲紋狀斑と微菌狀小點とを有するもの (6) 黄灰色にして雲紋狀斑と微菌狀小點とを有するもの

第一版說明 (1) 成蟲即ち木の葉蝶の開翅の狀 (2) 成蟲靜止の狀 (3) 卵 (4) 卵の放大 (5) 孵化當時の幼蟲垂下の狀 (6) 幼蟲 (7) 蛹 (8) 木の葉蝶の食草マアイ

第二版圖說明 圖は翅の裏面の變化を示す (1) 褐灰色にして著しき斑紋を有せるもの (2) 紫灰色にして微菌紋理を有せるもの (3) 黄褐色にして雲紋狀斑と微菌狀小點とを有するもの (4) 黄灰色にして雲紋狀斑と微菌狀小點とを有するもの

92
394

明治四十二年二月十五日印刷
明治四十二年二月十八日發行

不許
複製

發行所

岐阜市公園 名和昆蟲研究所

發行者兼
名和靖

岐阜市富茂堂五十番月ノ二

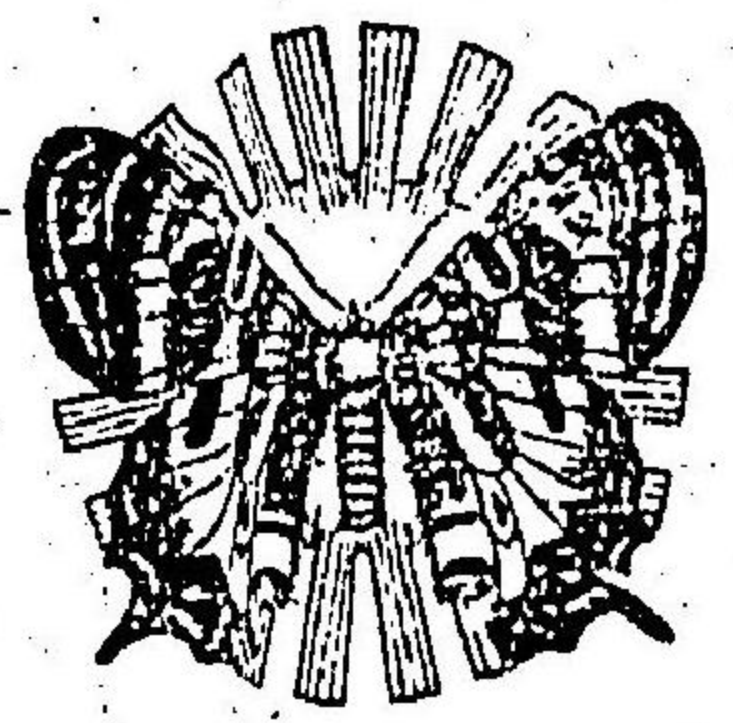
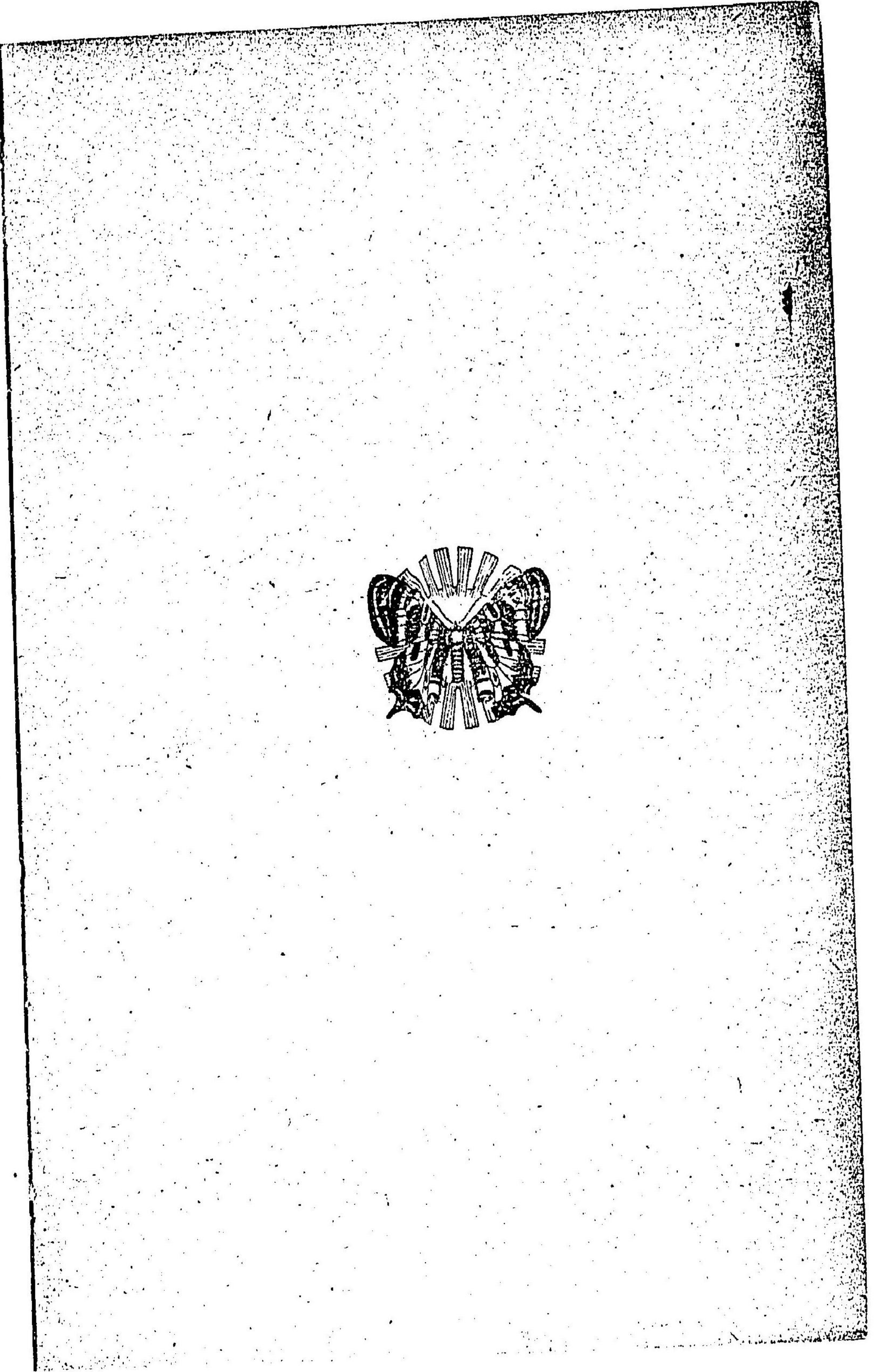
印刷者
河田貞次郎

岐阜縣大垣町大字郭四十五番地ノ二

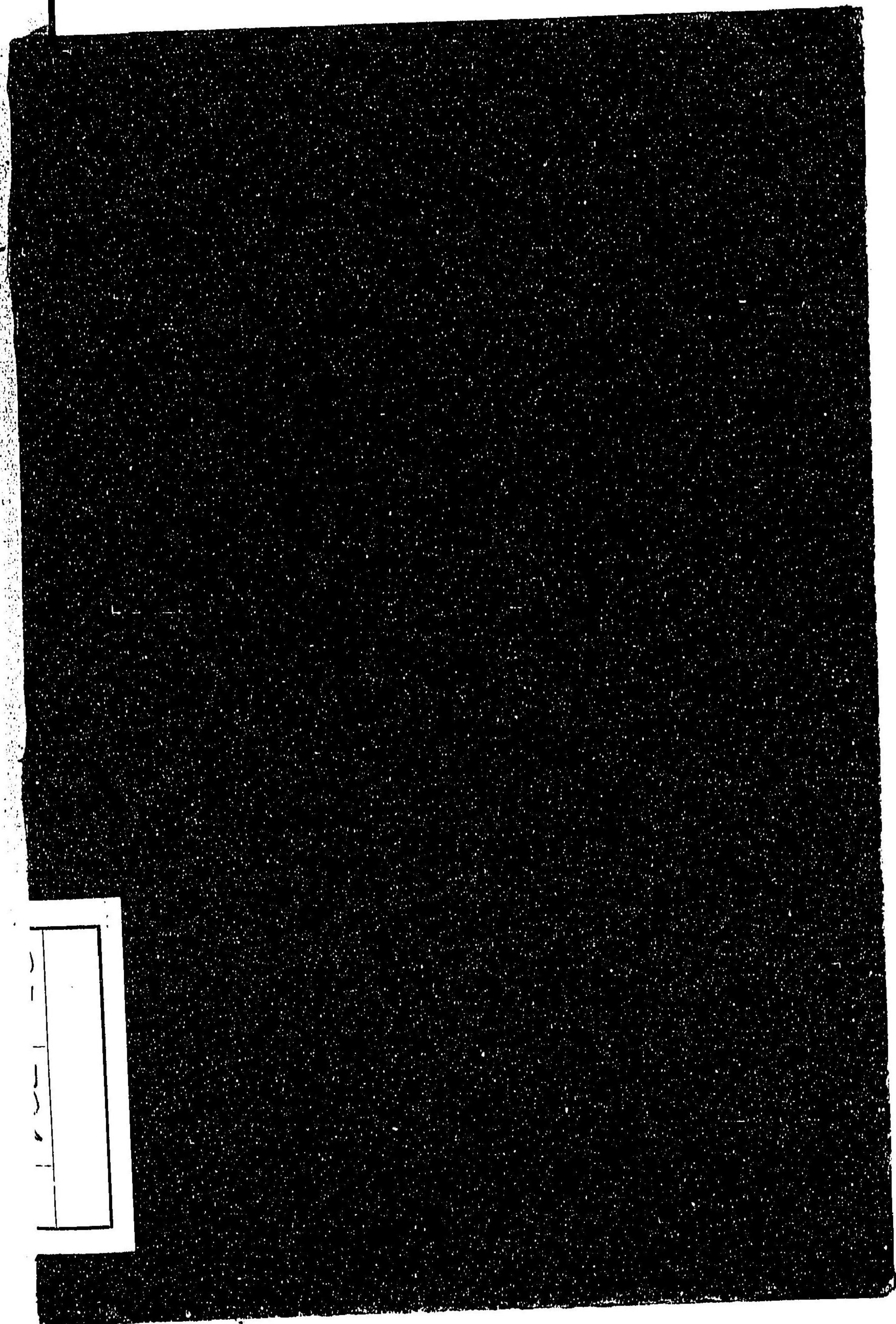
印刷所
西濃印刷株式會社

岐阜縣大垣町大字郭百五十三番月

定價金貳拾錢



92
394



1
2
3
4